

非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

金

【海外】

1. 価格推移

3月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	1,687.00 (6日)	1,472.35 (17日)
国内建値(円/g)	5,825 (25日)	5,196 (17日)
為替相場(円/\$、TTS)	103.01 (9日)	112.16 (25日)

3月の海外金相場は、2日に1,609.70\$/toz(トロイオンス)と\$1,600水準を保ちながらスタート、その後すぐに\$1,600台を割り込んだものの、3日に米連邦準備理事会(FRB)が景気を支える目的から緊急利下げに踏み切り、金利のつかない金への資金が流入したことで、\$1,600台を回復、その後は米株安を受けて実物資産の裏付けがある金を買われ、\$1,600台後半まで上伸した。

ところが、中旬入りすると、初めは高値圏で小浮動推移だったものの、12日以降は新型コロナウイルス流行の影響により米株式相場が急落したことから、株式投資による損失を埋める目的で金を売る動きが強まり大幅に急落、12日に\$1,600台をあっさり割り込むと、16日には\$1,500台を割り込み、17日には\$1,472.35と3か月ぶりの安値となった。その後、\$1,500水準前後でやや激しい値動きが続いたが、週明けの23日以降は株価急落を受けた換金売りの動きが一巡したことで急回復、24日には再度\$1,600台に達すると、戻り基調が加速し26日には\$1,634.80まで上昇した。しかし、月末では、米議会が2兆ドルの経済対策を成立させた上、FRBも金融緩和を拡大したことで\$1,600際まで反落、31日には\$1,608.95をつけて越月した。

2. 為替相場推移

3月の為替相場は、2日に\$1=108.66円(TTS相場、以下同じ)と円が反発してスタート、上旬にかけては新型コロナウイルスの世界的な感染拡大への警戒感から、リスク回避局面で資金が流入しやすい円に買いが先行、6日に\$1=107円水準まで上昇すると、週明けの9日には\$1=103.01円と円が大幅に上昇、2016年10月以来およそ3年5か月ぶりの高値をつけた。欧米でも新型コロナウイルスの感染が拡大し、世界景気の先行きへの懸念から投資家のリスク回避姿勢が強まり、円買いが優勢となったためであった。

ところが、中旬入りすると、ベースは円高・ドル安基調だったものの、後半以降は日銀が金融政策決定会合を16日に前倒しで開催すると発表したことを受け、追加緩和観測から円が売られた。さらに新型コロナウイルスの感染拡大で世界経済の減速懸念が強まり、投資家がリスク回避で保有資産の現金化を進めたことから、ドル需要が高まり円安が進行、19日には\$1=109.98円まで円が安くなると、連休明けの23日には、さらなるドル需要の高まりから\$1=111.82円まで円が後退した。その後も同水準での推移となったが、月末では新型コロナの長期化懸念により円が再び買われ、31日は\$1=109.83円となって越月した。

3月の円の対ユーロでの動きは、対ドルとほぼ同じ動きとなった。9日は€1=117.35円と、2016年11月以来の円高・ユーロ安となった。その後、ユーロが€1=122円水準まで戻すものの、月末には再び円が上昇、€1=120円前後まで反発した。

【国内】

1. 建値推移

3月の国内金山元建値は3日に5,586円/g(グラム)と前の月の末につけた高値圏を大きく下回ってスタート、上旬は新型コロナウイルスの影響による海外相場の上昇から5,600円水準から5,700円水準まで上げるもの、中旬にかけては、海外相場の続落から大幅に低下、17日には5,196円と月間最安値をつけるとともに、前の年の12月以来の安値を記録した。

ところが、下旬では、海外相場の反発と大幅な円安から急伸、25日には5,825円と月間最高値をつけるとともに前の月以来の高値を記録した。しかしながら、月末では海外相場の反落と円高基調から一転して弱含みとなり、31日には5,670円をつけて越月した。

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2020年2月分=令和2年2月分)

生産 : 10,415 kg (前月比 6.6%増、前年比 30.9%増)

出荷 : 8,987 kg (前月比 23.6%減、前年比 4.2%減)

在庫 : 5,072 kg (前月比 39.2%増、前年比 2.4%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

2月の生産は前月比、前年同月比とも増。出荷は円建て価格の大幅上昇により買い控えが見られ、前月比、前年同月比とも減。前年同月比は3か月ぶりの減。在庫は出荷減から前月比、前年同月比とも増。前年同月比は13か月ぶりの増。

銅

【海外】

2020年3月のLME銅相場は新型コロナウイルス感染が世界的に急拡大するなかを月初の\$5,600/t 圏から月末にかけて\$4,700 圏へと暴落した。この間、18日には2016年11月以来3年4か月ぶりに\$5,000を割り込み、23日には\$4,617.5と同年9月以来の安値をつけた。

新型コロナウイルス感染は3月に入って世界的に急拡大し、世界保健機関(WHO)は11日、「パンデミック(世界的な大流行)とみなせる」と表明した。AFP通信によれば、3月末現在、186の国と地域で820千人以上の感染、40千人以上の死亡が確認されている。コロナ・パンデミックが世界経済に甚大な影響を及ぼすことは確実視され、株価は世界的に大暴落した。

ダウ工業株平均は3月2日、米連邦準備制度理事会(FRB)の緊急利下げ期待から8営業日ぶりに上昇した。FRBは3日、フェデラルファンド(FF)金利を0.5%ポイント引き下げた。6日には米国で83億ドル規模の緊急補正予算法が成立した。しかし、株価はすぐに反落し、9日には2,031.76ポイント安と2月27日に記録した過去最大の下げ幅を大幅に上回った。石油輸出国機構(OPEC)と非加盟国との減産協議が不調に終わり、原油先物が4年ぶりの安値水準となったことが失望された。11日には米国がヨーロッパからの入国禁止を発表し、翌12日の株価の下げ幅は2,352.60ポイントと記録を更新した。15日にはFRBが1.00%ポイントの追加利下げと債券買い入れ額の拡大を発表し、さらに主要国の中央銀行と協調してドル資金の供給を拡充することに合意した。一方、16日には中国の工業生産、小売売上高、固定資産投資が1990年代以来の減少幅となったことが判明した。これを受け、株価の下げ幅は2,997.10ポイントとさらに記録を更新した。18日には終値が2017年2月以来の20,000ポイント割れとなった。20日には原油先物が一時、2002年2月以来となる\$20/bbl割れとなった。また、ゴールドマンサックスは米国の4~6月期の実質GDPが前期比▲24%/年と過去最大の減少となると予想した。24日には米国で2兆ドル規模の経済対策法案が成立するとの見通しから、株価は2,112.98ポイント高と過去最大の上げ幅で20,000ポイントを回復した。同法案は27日に議会で可決され、大統領の署名により成立した。しかし、コロナ感染がさらに拡大するなか、27日の株価は再び下落した。

新型コロナウイルス関連の鉱山操業縮小事例は以下のとおり。

MMGはラスバンバス鉱山(ペルー)の操業を縮小。

アングロアメリカンはチリでケジャベコ鉱山プロジェクトの開発工事とロスブロンセス鉱山の操業を縮小。

テックリソーシズはケブラダブランカ鉱山(チリ)第2期開発工事を停止。

コデルコはチュキカマタ銅鉱山坑内開発、ラホインカ、トラスパソアンディナ・プロジェクト(チリ)を停止。

BHPのエスコンディーダ鉱山(チリ)労組は会社側に対し厳格な健康安全対策を開始しなければ操業停止を要求。

フリーポートマクモランはセロベルデ鉱山(ペルー)の操業を停止。

アントファガスタはロスペランブレス鉱山(チリ)の能力増強プロジェクトの一部を休止。

グレンコアはモパニ鉱山(ザンビア)の操業を全面的に見直し。

リオティントはオユトルゴイ鉱山(モンゴル)の操業を縮小。

KGHM(ポーランド)は必要に応じて政府に支援策を要請する方針。

ヴァーレはヴォイジーベイ銅ニッケル鉱山(加)の操業を停止。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2019年の世界の銅鉱石生産は20,431千t、地金生産は23,949千t、消費は24,290千tでいずれも前年比微減となった。地金需給バランスは▲391千tから▲341千tへと引き続き供給不足で推移した。報告在庫は1.6%増の1,247千t、在庫/消費比率は2.7週間で横ばいであった。

鉱石生産の内訳は精鉱が0.6%、SXEWは1%減少した。国別には、チリが鉱石品位低下と一部の供給障害を主因に1%減少した。インドネシアはグラスベルグ、バツーヒジャウ鉱山の採掘鉱体の移行に伴う一時的な減産により45%減少した。コンゴ民主共和国(DRC)、ザンビアはSXEW鉱山の一時的な操業停止、計画減産、一部鉱山の操業トラブルで3%減少した。オーストラリア、カナダ、中国、メキシコ、ペルー、米国は前年の供給障害による減産の反動で増加した。パナマはコブレパナマ鉱山が新規稼働した。地域別には、北米が3%、ラテンアメリカは1%、オセアニアは3%増加したが、アジアは6%、アフリカは2.5%、ヨーロッパは0.5%減少した。鉱山稼働率は85.3%から84.3%にやや低下した。

地金生産の内訳は一次生産が1%減少、二次生産は1.5%増加した。国別には、チリがチュキカマタ製錬所の環境改善工事に伴う操業停止を主因に8%減少した。ザンビアは電力供給途絶、製錬所の操業トラブルや一時閉鎖に加え、2019年1月1日付で銅精鉱に輸入関税(5%)が導入されたことなどから40%減少した。インドはツーチコリン製錬所が2018年4月から操業を停止していることにより24%減少。その他主要生産国では日本、ペルー、米国、一部のヨーロッパ諸国が定修閉鎖や操業トラブルのため減少。中国は能力増強を背景に増加。オーストラリア、ブラジル、イラン、ポーランドは前年の供給障害による減産の反動から増加した。地域別には、アジアが2%、オセアニアは9%増加したが、北米は2%、ラテンアメリカは6%、アフリカは10%、ヨーロッパは2.5%減少した。精製工場の稼働率は86.4%から83.1%に低下した。

地金消費は中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)がネット輸入の7%減少が国内生産増に相殺されて2%増加した。その他主要消費国のなかでは米国、インドが増加、EU、日本は減少した。中国を除く世界は3%減少した。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

3/2	640	3/5	650	3/9	630	3/12	620	3/17	600	3/19	550
3/25	580	4/1	570								

2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2020年2月分=令和2年2月分)

生産	: 130,700t	(前月比 4.6%減、前年比 12.6%増)
出荷	: 135,500t	(前月比 12.2%増、前年比 2.8%増)
在庫	: 109,800t	(前月比 4.2%減、前年比 8.0%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2020年2月の銅地金生産は前月比4.6%減、前年同月比12.6%増の130.7千tと、それぞれ3か月ぶりの減少と2か月連続の増加となった。出荷は前月比12.2%増、前年比2.8%増の135.5千tで4か月連続と2か月連続の増加。内訳は内販が前月比7.0%増、前年比9.0%減の73.1千tで3か月ぶりの増加と8か月連続の減少。輸出は前月比19.0%増、前年比21.1%増の62.4千tと18年3月以来の高水準で4か月連続と3か月連続の増加。内販のうち電線向けは前年比7.6%減の46.9千tで5か月連続の減少、伸銅品向けは13.3%減の23.6千tで11か月連続の減少。在庫は前月比4.2%減、前年比8.0%増の109.8千tで3か月ぶりの減少と2か月連続の増加となった。

3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、2020年2月の銅電線出荷は前月比0.9%増、前年同月比3.5%減の54.7千t(推定)と前年比は5か月連続で減少した。うち内需は前年比3.4%減の53.3千tで2か月ぶりの減少、輸出は8.4%減の1.4千tで2か月連続の減少。内需の部門別には、自動車と電力が3か月連続、通信は2か月連続の増加、電気機械は18か月連続、その他内需は5か月連続の減少。

日本伸銅協会によれば、2020年2月の伸銅品生産は前年同月比6.6%減の60.7千t(速報)と15か月連続の前年比減となった。品種別には、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が5.0%減、自動車端子向けの黄銅条は16.3%減とともに13か月連続の減少となった。コネクタ向けの青銅板条は17.3%増と19か月ぶりに増加に転じた。エアコン向けの銅管は2.6%減と再び減少に転じた。

鉛

【海外】

2020年3月のLME鉛相場は新型コロナウイルス感染が世界的に急拡大するなかを月初の\$1,900/t水準から月末にかけて\$1,700水準へと暴落した。この間、25日には\$1,589と2015年11月以来の安値をつけた。

新型コロナウイルス感染は3月に入って世界的に急拡大し、世界保健機関(WHO)は11日、「パンデミック(世界的な大流行)とみなせる」と表明した。AFP通信によれば、3月末現在、186の国と地域で820千人以上の感染、40千人以上の死亡が確認されている。コロナ・パンデミックが世界経済に甚大な影響を及ぼすことは確実視され、株価は世界的に大暴落した。

ダウ工業株平均は3月2日、米連邦準備制度理事会(FRB)の緊急利下げ期待から8営業日ぶりに上昇した。FRBは3日、フェデラルファンド(FF)金利を0.5%ポイント引き下げた。6日には米国で83億ドル規模の緊急補正予算法が成立した。しかし、株価はすぐに反落し、9日には2,031.76ポイント安と2月27日に記録した過去最大の下げ幅を大幅に上回った。石油輸出国機構(OPEC)と非加盟国との減産協議が不調に終わり、原油先物が4年ぶりの安値水準となったことが失望された。11日には米国がヨーロッパからの入国禁止を発表し、翌12日の株価の下げ幅は2,352.60ポイントと記録を更新した。15日にはFRBが1.00%ポイントの追加利下げと債券買い入れ額の拡大を発表し、さらに主要国の中央銀行と協調してドル資金の供給を拡充することに合意した。一方、16日には中国の工業生産、小売売上高、固定資産投資が1990年代以来の減少幅となったことが判明した。これを受け、株価の下げ幅は2,997.10ポイントとさらに記録を更新した。18日には終値が2017年2月以来の20,000ポイント割れとなった。20日には原油先物が一時、2002年2月以来となる\$20/bbl割れとなった。また、ゴールドマンサックスは米国の4~6月期の実質GDPが前期比▲24%/年と過去最大の減少となると予想した。24日には米国で2兆ドル規模の経済対策法案が成立するとの見通しから、株価は2,112.98ポイント高と過去最大の上げ幅で20,000ポイントを回復した。同法案は27日に議会で可決され、大統領の署名により成立した。しかし、コロナ感染がさらに拡大するなか、27日の株価は再び下落した。

供給障害としては、リサイレックスは3月25日、ノルデンハム二次鉛製錬所(独)の生産を26日から停止すると発表した。需要不振、価格低迷、新型コロナウイルス・パンデミックが理由。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2020年1月の世界の鉛鉱石生産は前年同月比1.3%増の389千t、地金生産は4.5%減の918千t、消費は6.2%減の915千t、地金需給は前年同月の▲14千tから+3千tへと供給不足が解消した。地金の報告在庫は6.3%減の360千t、在庫/消費比率は1.7週間で横ばいとなった。

鉱石生産はアメリカが8.2%、ヨーロッパは5.1%、アフリカは25.0%増加、アジアは横ばい、オセアニアは10.9%減少した。地金生産はヨーロッパが1.8%、オセアニア

は7.7%、アフリカは9.1%増加、アジアは7.2%、アメリカは2.7%減少した。地金消費はヨーロッパ、アフリカ、オセアニアが横ばい、アジアは8.7%、アメリカは3.4%減少した。

中国は鉱石生産が160千tで横ばい、精鉱輸出入は未報告、地金生産は11.0%減の340千t、地金の輸出入は未報告。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は10.7%減の350千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

2/3	271	2/7	268	2/18	271	3/2	267	3/6	263	3/12	248
3/18	233	3/26	239								

3月はLME鉛相場が月末にかけて低下したことで、鉛建値も続落した。

2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2020年2月分=令和2年2月分)

生産 : 16,513t (前月比 6.2%減、前年比 2.0%増)
出荷 : 18,918t (前月比 2.8%増、前年比 18.6%増)
在庫 : 15,192t (前月比 14.0%減、前年比 5.0%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2月の生産は前月比減だが、前年同月比は増。前年同月比は2か月連続の増。出荷は蓄電池向けの停滞にもかかわらず、輸出が2か月連続で3千t近くも出たことで、前月比、前年同月比とも2か月連続で増。在庫は出荷増から前月比、前年同月比とも減。後者は8か月ぶりの減。

3. 需要部門動向

1月の自動車生産台数は前年同月比3.5%減の762,315台となり、4か月連続で前年同月を下回った。乗用車は前年同月比4か月連続のマイナス、トラックも同6か月連続のマイナスだが、バスは同5か月連続のプラスとなった。

2月の自動車輸出台数は前年同月比5.6%減の393,610台となり、5か月連続で前年同月を下回った。

一方、1月の二輪車生産台数は前年同月比11.0%増の54,272台と4か月ぶりに前年同月を上回った。

(一社)電池工業会の調査によると、1月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を合わせた総合計で2,045千個(前年同月比6%減)と4か月連続で低下したが、自動車用以外の鉛蓄電池は615千個(同2%増)と4か月ぶりに上昇した。その結果、鉛蓄電池のトータル出荷は自動車用の減が効いて、2,660千個(同4%減)と4か月連続で低下した。

鉛関連製品生産統計

		12月	1月
自動車	数量(台)	725,296	762,315
	前年同月比(%)	91.5	96.5
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	16,814	15,166
	前年同月比(%)	96.0	100.8

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

亜鉛

【海外】

2020年3月のLME亜鉛相場は新型コロナウイルス感染が世界的に急拡大するなかを月初の\$2,000/t水準から月末にかけて\$1,800圏へと急落した。この間、25日には\$1,773.5と2016年4月以来の安値をつけた。

新型コロナウイルス感染は3月に入って世界的に急拡大し、世界保健機関(WHO)は11日、「パンデミック(世界的な大流行)とみなせる」と表明した。AFP通信によれば、3月末現在、186の国と地域で820千人以上の感染、40千人以上の死亡が確認されている。コロナ・パンデミックが世界経済に甚大な影響を及ぼすことは確実視され、株価は世界的に大暴落した。

ダウ工業株平均は3月2日、米連邦準備制度理事会(FRB)の緊急利下げ期待から8営業日ぶりに上昇した。FRBは3日、フェデラルファンド(FF)金利を0.5%ポイント引き下げた。6日には米国で83億ドル規模の緊急補正予算法が成立した。しかし、株価はすぐに反落し、9日には2,031.76ポイント安と2月27日に記録した過去最大の下げ幅を大幅に上回った。石油輸出国機構(OPEC)と非加盟国との減産協議が不調に終わり、原油先物が4年ぶりの安値水準となったことが失望された。11日には米国がヨーロッパからの入国禁止を発表し、翌12日の株価の下げ幅は2,352.60ポイントと記録を更新した。15日にはFRBが1.00%ポイントの追加利下げと債券買い入れ額の拡大を発表し、さらに主要国の中央銀行と協調してドル資金の供給を拡充することに合意した。一方、16日には中国の工業生産、小売売上高、固定資産投資が1990年代以来の減少幅となったことが判明した。これを受け、株価の下げ幅は2,997.10ポイントとさらに記録を更新した。18日には終値が2017年2月以来の20,000ポイント割れとなった。20日には原油先物が一時、2002年2月以来となる\$20/bbl.割れとなった。また、ゴールドマンサックスは米国の4~6月期の実質GDPが前期比▲24%/年と過去最大の減少となると予想した。24日には米国で2兆ドル規模の経済対策法案が成立すると見通しから、株価は2,112.98ポイント高と過去

最大の上げ幅で20,000ポイントを回復した。同法案は27日に議会で可決され、大統領の署名により成立した。しかし、コロナ感染がさらに拡大するなか、27日の株価は再び下落した。

供給障害要因としては、ヴェダントリソーシズはスコープオン亜鉛精製工場(ナミビア)の生産を2月に再開した。同工場は2019年11月、原料不足のため生産を停止し、2020年4月に予定していた定修を前倒しで実施した。一方、同社は3月30日、スコープオン亜鉛鉱山の操業を4月末まで中断すると発表した。今年1月まで断続的に発生したオープンピットの地崩れのため鉱山操業が麻痺していることによるもの。地崩れは今後も発生する兆候がある。鉱山の操業停止が長期化すれば、精製工場の生産にも影響が出る。

トレバリマイニングは3月26日、カリブー亜鉛鉱山(加)の操業を価格低迷と新型コロナウイルスを理由に一時停止すると発表した。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2020年1月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同月比5.5%増の1,060千t、地金生産は8.4%増の1,175千t、消費は6.1%増の1,139千t、地金需給バランスは前年同月の+10千tから+36千tへとほぼバランス推移した。地金の報告在庫は3.8%減の854千t、在庫/消費比率は3.2週間で横ばい。

鉱石生産はアジアが5.0%、アメリカは8.1%、ヨーロッパは2.2%、アフリカは16.2%増加、オセアニアは横ばいとなった。地金生産はアジアが10.6%、アメリカは14.5%、ヨーロッパは2.0%、オセアニアは5.4%増加、アフリカは未報告。消費はアジアが8.0%、アメリカは5.0%、オセアニアは18.2%増加、ヨーロッパは横ばい、アフリカは14.3%減少した。

中国は鉱石生産が6.1%増の330千t、精鉱輸出入は未報告、地金生産は15.1%増の540千t、地金の輸出入は未報告。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は14.2%増の547千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

2/3	292	2/6	295	2/12	286	2/19	283	2/25	274	3/2	268
3/5	262	3/10	250	3/16	262	3/19	256	3/26	262		

3月はLME鉛相場同様、LME亜鉛相場が月末にかけて続落したことで、亜鉛建値も低落基調を辿った。3月中旬の250千円/tは2016(平成28)年5月以来の低水準。

2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2020年2月分=令和2年2月分)

生産	: 43,568t	(前月比 6.1%減、前年比 2.4%増)
出荷	: 41,702t	(前月比 3.4%増、前年比 5.8%減)

在庫 : 78,055t (前月比 2.5%増、前年比 16.2%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

2月の生産は前月比減だが、前年同月比は増。前年同月比は4か月ぶりの増。出荷は、輸出が増加し、前月比は増へ転換したものの、内販、とくにめっき鋼板向けが低下したことで、前年同月比は減となった。前年同月比は5か月連続の減。在庫は出荷低迷から前月比、前年同月比とも増。前年同月比は6か月連続の増。

3. 需要部門動向

2月の鉱工業生産指数は前月比0.4%増、前年同月比4.7%減の100.2(季節調整済、2015年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は3か月連続の上昇だが、前年同月比は5か月連続で低下した。経産省は生産の基調判断を「一進一退ながら弱含み」に据え置いた。同省によれば、今後は新型コロナウイルスの感染拡大を受けた生産の下押しで当面厳しい状況が見込まれるとのこと。

2月分の生産の内訳をみると、15業種中7業種で上昇、7業種で低下、1業種は横ばいだった。海外向けの半導体メモリなど「電子部品・デバイス工業」が伸びた。新型コロナの影響で部品調達が遅れている「自動車工業」は低下した。

2月の出荷指数は前月比2.6%増の99.8と3か月連続の増、前年同月比は4.7%減と生産と同様に5か月連続で低下した。鉄鋼・非鉄金属工業など14業種で上昇し「生産用機械工業」のみが低下した。

一方、在庫指数は前月比2.0%減の103.8、在庫率指数は前月比2.5%減の112.0となった。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、3月が前月比5.3%の低下、4月は同7.5%の上昇を見込んでいる。

1月の亜鉛めっき鋼板生産は前年同月比が4か月連続の減となった。

1月の伸銅品生産量は57,807t(確報値、以下同じ、対前年同月比▲7.5%)、(対前月比▲3.4%)、対前年同月比は14か月連続のマイナス(11月▲13.9%、12月▲8.7%)。全14品種中、対前年比プラスは銅管、黄銅線、青銅棒線の3品種。

黄銅製品では、黄銅条は7,180t(対前年比▲18.0%)、12か月連続の対前年比マイナス。自動車は銅条と同様の状況。電子部品出荷の世界的な低調により民生用コネクタ分野は低迷。黄銅棒は14,270t、6か月連続の対前年比マイナス(対前年比▲1.6%)。住宅設備関連のガス機器や水栓金具は例年に比べ動きが鈍く低調。

亜鉛関連製品生産統計

		12月	1月
亜鉛めっき鋼板	数量(千t)	734	809
	前年同月比(%)	86.6	91.4
黄銅製品	数量(t)	24,784	24,498
	前年同月比(%)	90.2	93.8
亜鉛ダイカスト	数量(kg)	1,339,510	1,407,786
	前年同月比(%)	87.9	109.0
亜鉛華	数量(t)	4,479	5,001
	前年同月比(%)	94.6	100.2

(出所:(一社)日本鉄鋼連盟、経済産業省生産動態統計調査)